

研究会報告

「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容—イスラーム化過程における
国家の戦略と役割」2019年度第3回研究会

日時：2020年2月23日（日） 10:30–18:00

場所：AA研マルチメディア会議室(304)

使用言語：英語, 日本語

10:30–12:00

Special guest: Henri Chambert-Loir (AA研外国人研究員)

文献講読: Syair Perang Mengkasar

13:00–14:20 菅原由美 (AA研共同研究員, 大阪大学)

「ババッド・タナ・ジャウイとワリ・ソンゴ」

14:30–15:50 深見純生 (AA研共同研究員, 大阪大学)

「ラムリとサムドゥラに関するノート—初期イスラーム化との関連で」

16:00–17:20 新江利彦 (AA研共同研究員, 鹿児島大学)

「海南省三亜市回輝人（海南回族または海南チャム族）に関するメモ」

報告1：菅原由美

「ババッド・タナ・ジャウイとワリ・ソンゴ」

Babad Tanah Jawi and Wali sanga

マタラム王国史伝である *Babad Tanah Jawi* (『ジャワ国縁起』) には、マジヤパヒト王国末期以降の歴史のなかに聖者(ワリなど)が徐々に現れ、ジャワの王国史に深く関わってくる。聖人たちがそれぞれどのように表現されているかを見ることによって、マタラム王国と新宗教であるイスラームの関係を考える。ただし、*Babad Tanah Jawi* 自体も現在までに研究者が主に参照しているのは、メインスマ版と呼ばれる、ジャワ語翻訳官ウィンテル及びカルトプロジョによりデルフトアカデミーに提供されたテキストの散文バージョンであり(底本は明らかではない)、ライデンやジャワに保管されている韻文の写本群については、これまでほとんど分析には使用されてきていない(今後の研究課題)。本発表もメインスマ版を利用する。

ジャワにイスラームを広めたとされている九聖者(ワリ・ソンゴ)は、必ずしも決まった9人ではなく、時代や出典によって構成メンバーが異なる。*Babad Tanah Jawi* に登場する主要な聖者は、聖者たちの始祖スナン・アンペル、聖者たちのリーダー的存在であるスナン・ボナン(アンペルの息子)、調停者スナン・ギリ、助言者・予言者スナン・カリジャガ、そしてスナン・クドゥス(役割不明)の5人であり、他にも数人聖者が登場する。現在のジャワで10人目の聖者として人気の高いシティ・ジュナルも登場する

が、異端者としては描かれていない。聖者たちは子弟関係、または婚姻を通じた親族関係を結んでいることが多く、アンペル（スラバヤ）を中心にしてイスラーム学を修め、総じて霊力（kasekten）を持ち、未来を知る予言者として王となる者たちのそばに登場し、王たちが王となる証を残していくが、マタラム王国の拡大に反して、その姿は見えなくなっていく。また、アンペルがイスラーム知の中心であったことはわかるが、マタラムに飲み込まれていく東ジャワ諸都市とイスラーム聖者の関係は必ずしも明らかにはされていない。今後、さらにマタラム とイスラームの関係について考察を進めるためには、イスラームを国の中心に据えることになるスルタン・アグン期における宗教者の役割に関する記述との比較をする必要があるだろう。

報告 2：深見純生

「ラムリとサムドゥラに関するノート——初期イスラム化との関連で」

A Note on Lamuri and Samudera: in Perspective of the Islamization in the 13th Century

アラブや中国などの 9～15 世紀の文献史料に登場するラムリがバンダアチェの東 15 キロほどのラムレ村の遺跡に同定され、しかもそこは 13 世紀初めにイスラム化していた可能性があるという (McKinnon 2011)。本稿はラムリの文献史料の後半 (12～15 世紀) とサムドゥラの史料 (13～15 世紀) を再検討して、両者の歴史的 position を明確にし、あわせて初期イスラム化の背景を考察する。

ラムリは 12 世紀にそれまでのクダに代わって、中国から南インドさらに西アジアに至る遠距離航路のマラッカ海峡における重要拠点になった。サムドゥラは 1280 年代に登場し、14 世紀半ばから 15 世紀前半まで中枢港市だった。ラムリはこの時期にも存続し、ベンガル湾の出入り口となることもあった。13 世紀末にサムドゥラがイスラム化する以前にラムリがイスラム化していた可能性はあるというべきであろう。他方、12～13 世紀には広州や泉州を冬季モンスーンで出航した中国船はラムリ (北スマトラ) で次の冬季モンスーンを待ったが、1270 年代にはマラッカ海峡を素通りして連年南インドを往復するようになった。北スマトラのイスラム化はこの航海事情の変化への対処のひとつだったかもしれない。

報告 3：新江利彦

「海南省三亚市のオチャツ（回輝人、海南回族または海南チャム）に関するメモ」

A memo about Utsat (Hainan Huize or Hainan Cham) in Sanya, Hainan

筆者は文部科学省科学研究費補助金を得て、2019 年 11 月に中国（海南省三亚市天涯区鳳

鳳鎮回輝村、回新村)においてオチャツ(海南回族)調査を、2019年12月～2020年1月にベトナム(越南、平順省咸浜県浜勝社及び咸順南県浜順社)においてチャム(南チャンパー、パンドゥランガ朝の遺民)調査を実施した。この調査と関係史料へのサーベイで得られた結果により、以下のことが確認できた。①ムスリムの海南島への来訪は海賊行為による略奪被害者という形で8世紀からみられること、②チャンパーから海南島への数次にわたる移住が10世紀から15世紀まで様々な史料に記録されていること、③オチャツ自身は宋末元初(13世紀)の移住と伝えていること、④オチャツの話す言語(回輝話)がチャム語と同じ祖語を持ち、今も多くの語彙を共有していること。本発表では、これらに基づいて、海南島ムスリムのチャム化と南北チャンパーのイスラーム化の年代について考察を行った。

ベトナム・チャムの間では、イスラームを「ヤーンバラウ」(yang baruw, 新しい神の教え)と呼び、イスラーム聖者たちは中部南端各地のチャム祠廟に祀られている。特に重要なのは阮朝維新六年(1912)成立の『大南一統誌』巻12「平順省誌」祠廟の条に見える楊鬚祠(ポークロンバラウ廟)である。チャムの伝承「ダムヌイ・ポーサハイヌー」(古文書番号 VMST.25 及び CCC.B-5)によれば、ジュク(Jek)という都市から来たポーハニインパン(Po Haniim Per)とポークロンバラウ(Po Klaong Baruw)、包み石、ポーシワンの子(batuw thap, anak Po Siwan)という二人の兄弟が新しい神をもたらした(1440年頃とされる)。包み石はチャムの墓石における祖先祭祀を指し、ポーシワンはNasiwan, Nursawan, Anushirvanの変形で、Etienne Aymonier 収集のチャムのムスリム王名表Aにおいて初代の王とされている。なお、これより約二百年早い、シャカ暦1125年(西暦1203-1204年)の広南省美山遺跡のチャム語碑文C.92B及びCに、北チャンパー、ヴィジャヤ朝の王ジャヤ・インドラヴァルマン・オンパタオに対する「ヤーンバラウ」(Yan Bharuv)の反乱と鎮圧が記され、同時期のチャンパーから海南島へのムスリムの避難の一因たりえる。

大越広南阮氏による南チャンパー(パンドゥランガ朝)征服の直後、1693年に「ふらりい」(潘里)から会安(ホイアン)への航海中に遭難したチャムの一団が中国船に同乗して長崎を来訪し、彼らを「観音の信者」と記した風説書が『華夷変態』(1732)七拾五番にあつて、ディシュマキー『世界誌』(1325頃)に書かれた「サンフの海」(bahar as-sanf, 南シナ海)におけるチャムの航海が続いていたことが確認できる。「観音の信者」については、ポークロンバラウの兄嫁であるポーサハイヌーがチャムの大地女神ポーイヌーヌガンと習合して天依阿那という占・越の共通の神格となり、天依阿那は更に天后・観音と習合し海の守護女神として信仰されているので、長崎の通訳はこの天依阿那を観音と認識したもののか。

回輝話と現代チャム語の口語形は膨大な語彙を共有する。越語に輸入された母を意味する古チャム語 *ana* (阿那) が現代チャム語では *inâ* であるのに回輝話では *ana* のままであること、鼻を意味する現代チャム語がモンクメール化して *mbaoh* であるのに回輝話はマレー系の *hudung* のままであることから、回輝話とチャム語は、古チャム語が越語に *ana* という借用語を与えた後で、かつ鼻などの語彙がモンクメール化される前に古チャム語から分化していったと考えられる。『華夷変態』(七十三番) は 1694~95 年の阮氏征服軍の壊滅と占城との和平(占城の順城鎮としての再興)の陰に占城王弟と羅宇人 (*laow /lo/,* 漢人の意) の活躍があったと記す。『大南寔録前編』(1844) は阮軍の壊滅は占城貴族屋牙達と清人阿班によるもので、和平前に清人阿班を「上野」へ退去させたことを記す。解放戦争に大功を有しながら和平交渉の障害となった占城貴族の郎党は、この時期のチャンパーから海南島への大規模移住の有力な候補となる。言語上のチャム化と同時に、法学派上のシャーフィイー化があったと考えられ、1930 年代に海南島三亜ムスリムすなわちオチャッを訪ねたドイツの人類学者スチューベルは、オチャッの法学派をシャーフィイー派と記したが、2019 年 11 月の筆者の聞き取りに対し、オチャッの人々は、我々はハナフィー派であると回答した。オチャッにおける法学派上のシャーフィイーからハナフィーへの帰属変更過程は不明である。

1612 年ごろ成立した『馬來編年史 (スジャラ・ムラユ)』のロイヤル・アジアティック・ソサエティ版では、チャンパーの都が *Bal* ではなく *Yak* とジャウィー文字(マレー語表記のためのアラビア文字)で記されている。これにより、ヴィジャヤ朝の都(漢語佔、梵語 *Campānagara*、アラビア語 *Madinah-as-Sanf*)のもう一つの名が *Yak* すなわちイスラーム聖者兄弟ポーハニインパン、ポークロンバラウの出発地 *Jek* である可能性が示された。今後、チャンパー、マレー、ジャワの年代記を精読し、南北チャンパーのうち先にイスラーム化したとおぼしい(海南島のオチャッの原郷のひとつであろう) *Yak/Jek* を中心に調査を進めたい。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.